
2020 手法としてのアール・ブリュット

Art Brut as Approach

AD 25 永見 悠宇
指導教員 佐久間 善典

1.研究目的

Art Brutという一種の芸術は、既存の芸術的流行や方法論を排除しようとする志向を持っているが、その個性的な作品たちからは、designとして十分に魅力的な装飾的技法をいくつも見出すことができる。私は、これらの技法を、あえて作為的な芸術技巧として自らのdesignに取り入れることができると考え、研究目的とした。

Art Brutは“Outsider Art”とも呼ばれ、そのアーティストの多くが精神や知能に障害を持っており、また、自分という内側のものをビジュアルに現すものである。よって、designとしてのArt Brutと考えれば根幹的な矛盾を抱えるテーマとなるが、今回の研究目的はArt Brutのビジュアルを額面的にとらえたときに見られる手法を見出す逆説的な試みにある。

2.調査と分析

主に、“Art Brut”を提唱したJean Dubuffetが蒐集した作品群を調査し、それぞれのアーティストの用いる技法や作品に見られる特徴を分析した。

特徴的で、その手法が分かりやすく使われている作品としては、画面全体に拡張と内部重複を繰り返すEdmund Monsielのドローイングや、Martin Ramirezの見る者を幻惑させる直線や曲線の連続等が挙げられる。それぞれが強烈な個性を持っているArt Brut作品だが、同じモチーフを何度も反復するタイプのアーティストが多く存在することが分かった。

3.コンセプトの立案

Augustin LesageやAdolf Wölfliの絵に準じて精密さを持った連続する左右対称の絵柄を描く。その連続する絵柄(パターン)をもって、見る者に反復強迫を感じさせる絵を目指す。

おおよその外形は台形をイメージし、色彩を多く使い、キリスト教的モチーフを使うことも考える。

4.デザイン展開

まず、左右対称の構図を描く。外形線も左右対称なので、おおよその位置を定規で照らし合わせながら模様の枠をつくった(Augustin Lesageの作品を見ると正確に左右対称というわけではなく、左右に色や形の微妙な違いが見られる。座標等を使った計測によって導出

されたものではなくフリーハンドに近い絵画であると考えられるので、それになるべく準ずる仕方を採用した)。そして、横一列に同じ図形を並べていき、その列を連ね、隙間を埋めた。

5.完成図



6.結論

今回の研究を通して、この類の密度の高いArt Brut作品を描くことが、どれ程多大な精神力を要するかを痛感した。これを生涯描き続けたアーティストたちの精神の異常性も直に理解できたと思う。また、Augustin Lesageの模様は、おおよその図形が弧できていることが分かった。

精密な図形を大量に並べたときの美しさと、見る者に与える幻惑を知り、結果としてdesignの引き出しが広がったことを実感した。

7.参考文献

- ・新潮社 芸術新潮 2005 11月号
- ・美術出版社 美術手帳 2007 5月号
- ・求龍堂 「OUTSIDER ART」